

はじめに (『「失われた二〇年」からの逆照射戦後日本資本経済分析』の執筆にあたって)

ポスト冷戦研究会 報告 2017年12月23日(土) 明治大学研究棟 4F 第2会議室
 明治学院大学平和研究所所員・前教授 涌井秀行

冷戦構造の溶解と共に始まった「平成大不況」は、既に20年を超えた。こういう事態は、これまでの不況時によく見られたワン・シーンではない。「経済成長」というメッキがはげて、深部にあった戦後資本主義の「基盤」が表面に浮き出てきた事象ではないのか。「過疎化」・「限界集落」・「派遣労働者」・「住宅ローン地獄」・「3.11 東日本大震災」・「原発事故」という事象・事件は、戦後日本資本主義の核心部分＝【基盤】の表れたモノ＝「表象」であり、しかし、これまで「成長」の促進要因となっていた【基盤】が反転して、マイナス要因として働いているからではないのか。「失われた20年」の解剖＝戦後日本資本主義とはなんだったのか。そのための構造分析がいま求められてはいないか。そしてそれをできる時が、今なのではないか。本書は、「限界集落」「過労死」「非正規労働」という事象に逆照射をかけ、戦後日本資本主義の構造をあぶり出してみよう、という試みである。

本書は、研究・専門書としてはなく、一般読者向けに読みやすさを第一に書いたものである。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~hwakui/index.htm>

引用ページ数 参考文献詳細: gyakushoushasanbun.pdf

データ ファイル名 : hassakuExcel.xlsx

関連前著(シリーズ大月7巻)との関係

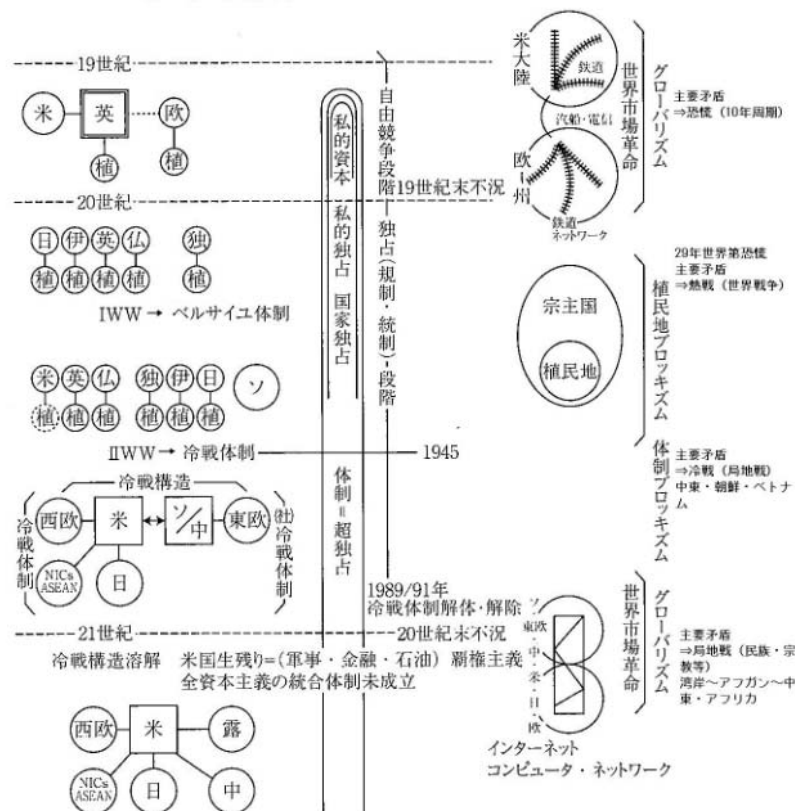
- (1) 【基盤】＝土地所有を詳述 (2) 戦後資本主義の構造規定を鮮明に打出〔外生循環構造〕
- (3) 山田『分析』を意識＝戦前の構造を要説 (4) 分かり易さ＝曼荼羅図絵を意識

＝内容＝

戦後日本資本主義分析の方法

- (一) 世界構造論的把握(戦後冷戦体制論 cf.) としての一国分析

1-1 図 世界構造論的視角—世界システム(諸国家の体系)と一国分析



アントニオ・ネグリ/マイケル・ハート 『帝国』
 ①「帝国」とは、いわば巨大な資本制システム ②国民国家に代わる「グローバルな主権」＝〈帝国〉

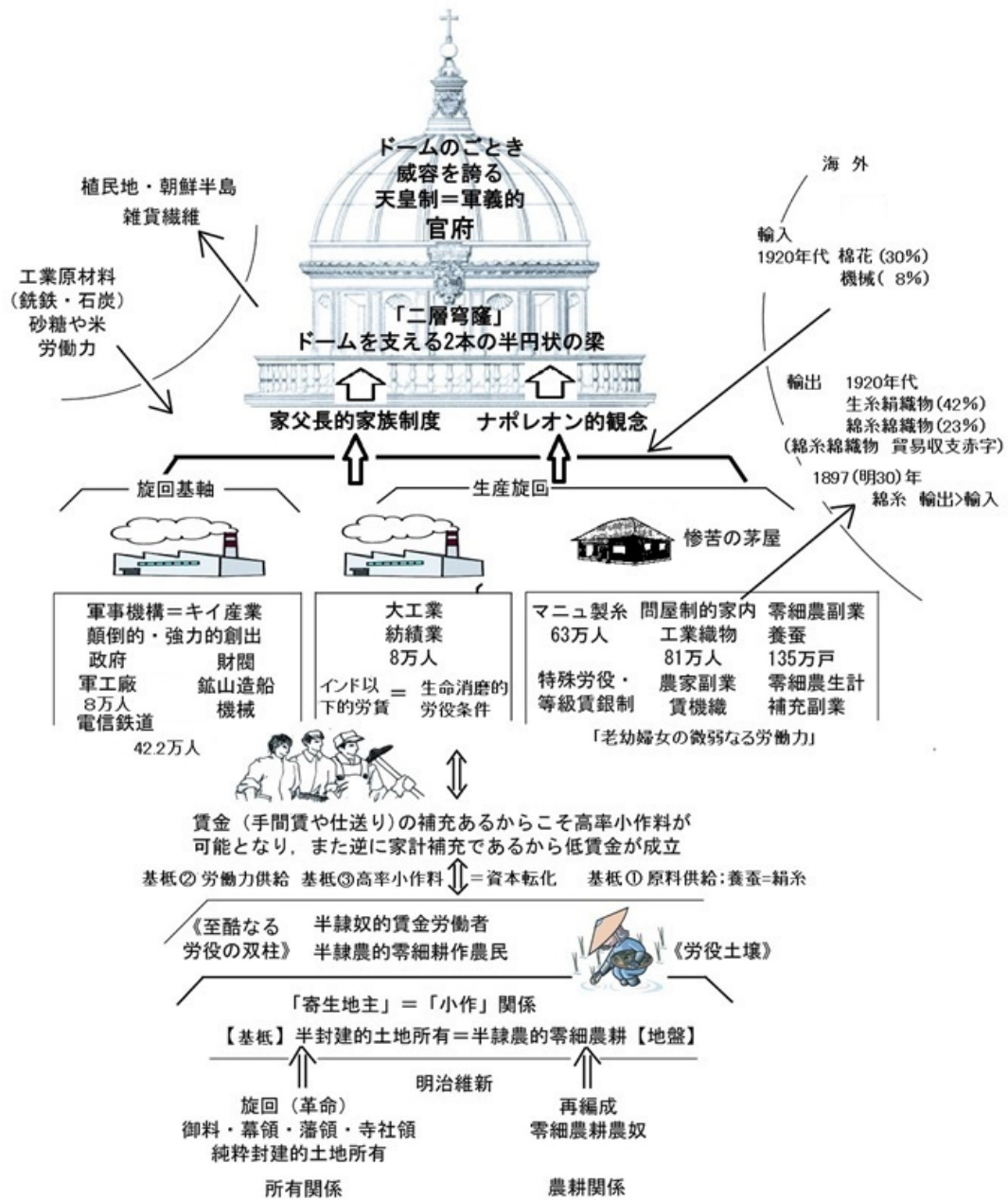
ジョバン・アリギ 『長い20世紀』
 世界的な蓄積体制＝冷戦軍事インフレ蓄積メカニズムの変容(私見＝我流ですが)

∴冷戦体制論

(二)「古層」「執拗低音」(丸山真男)「土着の世界観」(加藤周一)としての一国分析

曼荼羅 A 『分析』 読みとく=絵とき=図解

3-1 図



(1) 農業/農村=『根本問題』記述 加えて 「高率小作料」の根拠 P.66~67 に文章で記述

→1次方程式 で表示

表 3-2 明治政府の地価確定方程式

[第1則] 自作農の場合 前提強制条件: 収穫量 1.6 石, 1 石 3 円
x (=4.8 円)

$$\text{地価} = \left[\frac{\text{収穫量}}{x} - \text{種肥料} - (\text{地租} + \text{村入費}) \right] \div (\text{利子率})$$

$$y = \left[\frac{x}{x} - 0.15x - (0.03y + 0.01y) \right] \div 0.06$$

[第2則] 小作農の場合 前提強制条件: 収穫量 1.6 石, 1 石 3 円
(x=4.8 円) 小作米/料=収穫米 68%

$$\text{地価} = \left[\text{小作米/料} - (\text{地租} + \text{村入費}) \right] \div \text{利子率}$$

$$y = [0.68x - (0.03y + 0.01)y] + 0.04$$

高率小作料 = 寄生地主(化) ⇔ 江戸時代

(2)

日本学術会議が二〇一〇年のように、「徳川時代には無税であった都市の土地(江戸=東京・大阪・京都の市街地)にも、地租改正によって土地所有証明書である地券が発行され、地租が徴収された。戦前の東京においては「総世帯数の・・・九四・六%(昭和二年)は借地人・借家人」で東京市一五区の宅地は「全面積の四分の一は一万坪以上の大土地所有者一〇八人によって所有されて」いた、と瀬川も指摘している。『逆照射』P.33.

(3) インド以下の労働賃金=

『分析』

	工 (賃)	石炭 (賃)	器具 (賃)	包装荷 (賃)	諸雑 (賃)	金 (賃)	合 (賃)
日本の場合の生産費	135.5	50.7	65.5	17.1	45.1	50.0	364.0
インドの場合の生産費	151.9	86.7	90.1	40.3	44.3	45.5	458.7

日本紡績業=「典型的なインド以下の労働賃金および肉体消磨的労働条件をもつ大工業

「日本の()業が、先進国との異常な距離で発足しながら、躍進的興隆を遂げた所の、最奥の基礎は、劣悪な労働条件の下でなされる極度の労役()なるものである。」

〔問題〕()にあてはまる用語を記入しなさい。(点)

4-1表 小型自動車1台あたり労働生産性の日米比較(1981年)

	フォード		GM		東洋工業		日産	
所要労働時間	84 時間		83 時間		53 時間		51 時間	
労賃	1848	27%	1826	29%	620	13%	593	12%
資材購入費	3650	53%	3405	54%	2858	58%	2858	57%
その他コスト	650	9%	730	12%	350	7%	350	7%
非製造コスト	350	5%	325	5%	1100	22%	1200	24%
コスト計	6948	100%	6286	100%	4928	100%	5001	100%

単位：ドル， %

『逆照射』P.98.

曼荼羅 B (次ページ) 『根本問題』P14.大幅に Ver.UP

- (1) 戦後日本資本主義の基本構造/構成=外生循環構造/構成=外からの資本主義発展の道
 (イ) 構造/構成 ⇔ 「型制」規定
 (ロ) 世界構造論的把握(戦後冷戦体制論 cf.)としての一国分析
- (2) 図の説明 (4 ページ)

図 4-1 戦後日本資本主義の基本構造 / 構成 外からの資本主義発展の道

国民国家「溶解」= E U 形成時代において、アジアに残された唯一の資本主義の道
 国民経済の「完結」性の弛緩・解体
 アジア資本主義の起動（アジア NICs → 中国沿岸部）

